

■ ECBの政策判断がどちらに転んでもユーロの先行きには暗雲？

下図でも確認できる通り、ドル／円は7月下旬以降、基本的に21日移動平均線（21日線、現在は146円台半ばに位置）を下値サポートとして強気の展開を続けている。

9月に入ってから、取引時間中に21日線を下抜けたのは2回。それはいずれも日足ロウソクの下ヒゲ部分であり、実体部分では下抜けていない。1回は今日1日で、同日発表された8月の米雇用統計における失業率の上昇を受けたもの。もう1回は今週の週明けで、それは先週末に掲載された例の日銀総裁インタビューの内容を受けてのものであった。



おさらいをしておくと、8月の失業率の上昇は労働参加率の上昇が主要因と考えられ、一時的なドル売りはAIアルゴの瞬間反応によるものであったと見ていいだろう。

また、日銀総裁インタビューの内容については、市場関係者の多くが指摘しているように円安けん制を意図した一種の口先介入であったものと見られる。日銀総裁は「年末までに十分なデータが揃う可能性はゼロではない」などとインタビューに答えていたが、この「ゼロではない」に対して市場はヤケに過剰に反応した。それは、まさに政府・日銀にとって「思うつぼ」だったのだろうが、その持続力は限られ、足元では再び147円台後半まで値を戻している。

むしろ、1日以降のドル／円はレンジが若干引き上がった感じがあり、目下は147円処を軸とした146－148円処のレンジ内での値動きとなっている。ただし、148円手前のところでは幾度も押し戻される格好となっており、当面は同水準を上抜けるかどうかの正念場と言える。

仮に上抜ければ、昨年11月初旬ごろに位置していた148円台半ばの水準が意識されやすくなると見られる。逆に、148円手前の壁を破れなければ、ひとまずは21日線を試す動きとなろう。なお、ひとたび21日線をクリアに下抜けると、調整幅が結構深くなる可能性もないではない。まずは1日安値＝144.44円が試され、これを下抜けると少し長い目で89日移動平均線（89日線）を試しに行く可能性さえあると個人的には見る。

目先は、やはり本日（14日）行われる欧州中央銀行（ECB）理事会の結果が大いに気になる。結果の公表を数時間後に控えるなか、いまだ利上げに対する市場の見方は大きく2つに分かれたまま。ここにきて、少々利上げ期待が高まってきている模様である。

ただ、仮に今回、ECBが利上げ実施の決定を下したとしても、それはユーロの買い材料にはなりにくく、結局のところ「据え置き」、「利上げ」のどちらに転んでもユーロの先行きには暗雲が漂うということになるものと思われてならない。

欧州連合（EU）統計局が先週7日に発表した第2四半期のユーロ圏域内総生産（GDP）確報値は前期比0.1%増と、7月下旬に発表された速報値＝同0.3%増を下回っていた。域内経済の成長はほぼ止まったと言わざるを得ず、続く7－9月期は再びマイナス成長に陥落する恐れもあるとされる。こうした状況下でユーロを積極的に買い上げるのは少々躊躇われるというのが正直なところである。

目先は、ユーロ／ドルが1.07ドル処を明確に下抜けるかどうかを見定めたい。下抜ければ、差し当たり5月安値＝1.0635ドル処や3月安値＝1.0516ドル処を順に試す動きになりやすいと見られる。

（09月14日 09：25）